

“一十借用量詞”と“満十名詞”

——日本語との比較を兼ねて——

張 麗群

キーワード：借用量詞、容器、名詞、計数機能、認知

0 問題提起

すでに多くの先行研究に¹⁾指摘があるように、数詞“一”が次のように借用量詞と共起する場合、数詞“一”の表す意味に変化が生じることがある。

(1) a 一个桌子 (一つのテーブル)

b 一桌子菜 (テーブルいっぱいの料理)

(1) aにおける“个”はもっぱら助数詞(中国語では量詞といい、以下量詞という)として用いられるものであるのに対し、bにおける“桌子”(テーブル)は一時的に名詞から借用し、量詞として使われる「借用量詞」である²⁾。数詞“一”がaでは“个”と共に“桌子”を連体修飾し、テーブルを数える役割をし、一つという具体的な数を意味する。一方、bにおいても、“一”は“桌子”と一緒に“菜”(料理)を連体修飾しているが、この場合の“一桌子菜”は“两桌子菜、三桌子菜……”に対して用いられているというよりは、むしろ、「テーブルに料理がいっぱい」という意味が優先して解釈される。つまり、数詞“一”が借用量詞と共起すると、具体的な数を指すだけでなく、“満”(いっぱい)の意味になるということである³⁾。朱德熙(1982)、刘月华(1983)、王希杰(1990)などではいずれも数詞“一”と借用量詞との共起現象について触れているが、“満”との違いについてはほとんど言及していない。

そこで、本稿は数詞“一”が借用量詞と共起する場合、“満”の意味が生じるというこれまでの指摘を踏まえて、“一”が借用量詞と共起することによって表される“満”の意味と形容詞の“満”が名詞と共起する場合との間にどのような共通点と相違点があるかについて考察し、さらに日本語の対応表現についても言及する。

1 “一”と“満”について

この章では数詞“一”が借用量詞と共起する場合に生じる「いっぱい」という意味がどんなものであるかを考察する。まず“一”と共起する借用量詞及び“満”と共起する名詞の性質について見る。

1. 1 “一”と共起する借用量詞としての名詞

- (2) a 一个箱子 (一つの箱) a' 一箱子衣服 (箱いっぱい洋服／ひと箱分の洋服)
b 一张桌子 (一つのテーブル) b' 一桌子菜 (テーブルいっぱいの料理／ひとテーブル分の料理)
c 一个院子 (一つの庭) c' 一院子树 (庭いっぱい木／ひと庭分の木)

上の例文において、aでは“一”は数詞、“个”は量詞、“箱子”（箱）は名詞として機能し、“一个”は計数機能を持つ。b、cについてもそれぞれの品詞の意味は異なるが、機能的にはaと同じとらえかたが可能である。一方、a'では“一”は数詞、“箱子”は借用量詞、“衣服（洋服）”は名詞として機能し、洋服を“箱子（箱）”で数えるのみならず、箱の中に洋服はいっぱい入っているという意味をも表す⁴⁾。b'、c'についてもそれぞれの品詞の表す意味は違うが、機能的にはa'と同じである。a'のように借用量詞として用いられる名詞には“箱子”のように、「物を入れる」容器もあれば、“桌子（テーブル）”のように、「表面に物をのせる」ようなものもある。また、“院子（庭）”のように、場所を表すものもあれば、さらに、

- (3) a 一脸汗 (顔じゅう汗だらけ)
b 一身泥 (体じゅう泥だらけ)
c 一手油 (手に油だらけ)

にある“脸（顔）、身（体）、手（手）”のように、容器のメタファーとして、人間の体の一部を表すものもある。ここでは、これらを一括して「容器」とする。そもそも容器とは何かについて、山梨（1995）では容器には閉じた空間領域を持つもの（箱など）と平面的に開かれた空間領域を持つもの（小皿など）があるとする一方、人間の生活の場における具体的な経験との関連で、容器の意味はさらに社会的な空間、心理的な空間へと拡張されていくという。氏は「容器」をプロトタイプとしての容器ではなく、認知図式としてのイメージスキーマの意味で使うものとしている。本稿もこれに賛同する立場で、「容器」という用語を広い意味で使うことにする。つまり、数詞“一”と共起できる借用量詞にはせまい意味での「ものを収納する」ために、閉じた空間領域をもつ容器だけでなく、平面的に開かれた空間領域をもつものや、さらに、そこから意味的に拡張されていく場所詞や容器のメタファーとして、身体名詞などがあるということである。

1. 2 “満”と共起する名詞

“箱子、桌子、脸、院子”などの名詞は（2）と（3）で示した通り、まず借用量詞として“一”と共起することができる。

- (4) 满箱子衣服 (箱いっぱい洋服) 满脸汗 (顔じゅう汗だらけ)
满桌子菜 (テーブル ippaiの料理) 满身泥 (顔じゅう泥だらけ)
满院子树 (庭いっぱい木) 满手油 (手に油だらけ)

しかし、(4)では名詞として形容詞の“満”と共起する形をとっている。すなわち、“箱

子、桌子、脸、院子”は(2) a'、b'、c'及び(3) aと(4)とでは品詞性が違い、前者では借用量詞としてであり、(4)では名詞のままになっている⁵⁾。“満”は数詞ではなく、形容詞なので、直接名詞を修飾できる。こうした違いはあるものの、上の例を見る限りでは「容器」であれば、“一”だけでなく、“満”とも共起可能である⁶⁾。

1. 3 “一”と“満”の意味と用法の違い

中国語で普通“衣服(洋服)”を数えるときは“一件衣服(一着の洋服)、一套衣服(上下ワンセット)”のように“件、套”のような量詞を用いるが、しかし、“衣服”を、ものを納める容器の中に収納すれば、容器となる名詞を借用量詞として用いて数えるということもできる。例えば、

- (5) 一抽屉衣服(引き出し一つ分の洋服/引き出しっぱいの洋服)
- 一箱子衣服(トランク一つ分の洋服/トランクっぱいの洋服)
- 一盒子衣服(ひと箱の洋服/箱っぱいの洋服)

(5)にある“一+借用量詞”は訳文のようにいずれも二つの意味に解釈できる。一つは計数機能として使われる“一”の本来の用法であり、もう一つは“満(いっぱい)”の意味であると言われている。しかし、二つの意味は無関係ではなく、“満(いっぱい)”の意味は“一”より派生されたものと考えられる。われわれは“衣服”を“一箱子”で数える場合、単にその服が箱の中に入っていればよいというわけではない。“箱子”の中の洋服の数量が少なければ“一箱子衣服”とはいえないからである。実際に二、三枚なら、“两、三件(二、三着)”ということができる。少なくとも“箱子”の半分以上(半分の場合は“半箱子(トランク半分)”)という言い方があり、半分より多く、一箱より少ない場合は“大半箱子(トランク半分以上)”ということができる)ないと、“一箱子”はいいにくいであろう。ということはやはり一定の量を満たしてはじめて、“箱子”で数えられる。換言すれば、“一箱子”というためには“一箱子”に近い量の洋服が実際に入っていなければならないということである。また、次の文も同じである。

- (6) 栽了一院子树⁷⁾(庭に木をいっぱい植えた)

普通“树”を数える時は“棵”という量詞を使うが、“树”を“院子(庭)”の中にいっぱい植え、さらに、それを数える場合は(2) c'の表現になる。つまり、“一+借用量詞”で表現するには借用量詞となる「容器」はある程度、量的に満たされなければならない。その意味で、“一+借用量詞”に“満”の意味が生じるというもうなずける。しかし、これは“一+借用量詞”がそのまま“満+名詞”と同じであることを意味するものではない。

では、“一+借用量詞”によって表される「いっぱい」という意味と形容詞の“満(いっぱい)”とはどのような相異があるのだろうか。以下、両者の違いを見ていくことにする。仮に、“一+借用量詞”が本当に「いっぱい」の意味を表すのなら、さらに「いっぱい」という意味の副詞と共起しないはずであるが、次に見るように、“一+借用量詞”の前に“满满”が付加して、“满满+一+借用量詞”の形で使われている。

(7) a 满满地栽了一院子树。

庭いっぱい木を植えた

b 满满的一院子树。 (汉语学习 1999 王红旗)

庭いっぱいの木

(8) 他把这些东西装了满满的一书包,背起来出了店门。(短篇小说)

彼はそれらのものをカバンの中にぎっしりとつめてから、背負って店を出た。

(9) 没隔三天,我又和一位到四川去的旅客大吵一架。原因是他付款用满满一手绢硬。

(短篇小说)

三日も経っていないのに、私はまた四川から来た旅行者と大げんかした。原因は彼がハンカチいっぱいのコインで支払いをしたからだ。

(7)～(9)のように、もし“一院子、一书包、一手绢”がすでに「いっぱい」の意味であるなら、下線の“满满”は余剰的であり、必要のない成分になる。しかし、実際に“一院子”と“满满的”一院子、“一书包”と“满满的”一书包、“一手绢”と“满满”一手绢との間に違いがある。前述した通り、“院子、书包、手绢”が借用量詞として“一”と共起する場合、ある程度の量に達していることが前提であるものの、その量は“満”になっているか否かは問題ではない。つまり、“一院子、一书包、一手绢”はどちらかといえば、「容器」全体を一つの単位として示すのみであり、その量がいっぱいになったかどうかは不問であることから、“满满”を付加することによって、まんべんなく全体が満たされる意味あい加わるのである⁸⁾。これに対し、“満+名詞”に“满满”を付加すると、不適切な文になってしまう。

(7') *a 满满地栽了满院子树。

*b 满满的满院子树。

(8') *他把这些东西装了满满的满书包,背起来出了店门。

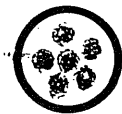
(9') *没隔三天,我又和一位到四川去的旅客大吵一架。原因是他付款用满满满手绢硬币。

“満+名詞”における“満”は本来「いっぱい」の意味を表すものである。“满院子树”、“满书包(東西)”“满手绢硬幣”で表現する場合、「庭には木がいっぱいある」「カバンの中は(もので)いっぱい」「ハンカチの中はコインでいっぱい」という意味が表される。つまり、“満”の場合は“一”と違って、計数機能がないため、共起する名詞(容器)を一つの単位としてとらえるのではなく、容器の中身がいっぱいであることを表す。言い換えれば、容器(内部あるいは表面)は中身で満たされたということである。したがって、“満”の前にさらに“满满”を付加すると、余剰的成分になり、非文になる。このことから、“一+借用量詞”によって表される「いっぱい」という意味と“満”によって表される「いっぱい」とはその内実もさることながら、われわれの認知のしかたも同じではないことがいえる。

2 認知の観点から見た“一”と“満”の違い

山梨正明(1995)は認知論的観点から「言葉は外部世界にたいするわれわれの認知の様式に密切にかかわっている。したがって、同じ状況を伝えようとする場合にも、その状況にたいする表現形式の選択のちがいが、外部世界にたいする主体の視点のおき方やパースペクティブのとり方のちがいを反映している」というように指摘している。本がほぼ満杯状態で入った箱を見て、“一箱子(的)书”と表現するか、“满箱子(的)书”と表現するかはまさに「外部世界にたいする主体の視点のおき方」に深く関わっている。“一箱子(的)书”と表現する時は“满满”によってさらに修飾され得ることからも推測できるように、「箱の中の本がいっぱいだ」ということを表現しようとするのではなく、“箱子”全体を一つの単位として括ってとらえているという見方であり、これに対し、“满箱子(的)书”では“满”にはすでに「いっぱい」の意味が含まれているため、さらに“满满”によって修飾されることは不可能であることからも分かるように、「箱は本でいっぱいになっている」という認知のしかたである。この違いを図で示すと、次のようになる。

a “一+借用量词”



b “满+名词”



aは“一+借用量词”を用いる場合であり、認知のフォーカスは黒い線に置かれ、容器全体を一つの単位として(中身は少量ではなく、容器で数えられるに値するほどの量が必要であるが、それは視点には入らない)とらえるものであり、容器が前景化され、容器の内容やその空間は背景化される。bは“满+名词”を用いる場合であり、認知のフォーカスは黒い点の部分、つまり、われわれの関心はいっぱいになっている容器の内容のほう(容器となるものはあくまでも補助的な⁹⁾ものにすぎず、視点には入らない)に置かれ、容器の内容やその空間が前景化され、容器自体が背景化される。aの“一+借用量词”は容器全体に視点が置かれるため、

(10) 一大箱子(的)书。(大箱一つ(分)の本)

一小箱子(的)书。(小箱一つ(分)の本)

一木头箱子(的)书。(木箱一つ(分)の本)

のように、容器の特徴や属性を示す“大(大きい)、小(小さい)、木头(木)”のような成分が“一+借用量词”の間に入ることが可能であるが、“满+名词”の間に入ることはできない¹⁰⁾。

(10') *满大箱子(的)书。

*满小箱子(的)书。

*满木头箱子(的)书。

また、“満十名詞”を用いる場合の認知のフォーカスは容器の内容やその空間のほうに置かれるため、“満十名詞”の後に方位詞(里(中の意味))を付加することができるが、“一+借用量詞”にはそうした方位詞を付け加えることができない。

(11) 满箱子里都是书。

*一箱子里都是书

次の例文は場所を表す“街(町)”であるが、“满街里”は用いられ、“一街里”にすると、非文になる。

(12) 俺们套上大骡子大马满街里这么一转, 干多干少, 也算是表了态, 亮了亮相儿呀!

(短篇小说)

俺達がラバやら馬やらを連れて、町中を回ったら、これで俺達の態度や立場が公表されることになり、みんなに分かってもらえるんだよ。

(12') *俺们套上大骡子大马一街里这么一转, 干多干少, 也算是表了态, 亮了亮相儿呀! もし“街(町)”のみを借用量詞として使用するなら、

(13) 一街人都闻声回头, 马路对面的两个巡逻的武警也站住往这边瞅, 眼神警觉。

(短篇小说)

町中の人みんな振り返り、道路の向かい側にいるパトロール中の警察も立ち止まって、注意深くこちらを眺めている。

のように“一”と共起して、“街”全体を一つの単位としてとらえることが可能であるが、しかし、(12)のように“街”の後に方位詞がつくと、空間(町)そのものが場所として目立ち、認知のフォーカスも“街”の中の具体的な空間に向かうことになるため、“街”全体を一つの単位としてとらえることは難しくなるのではないだろうか。

(14) “不可能”! 杨来春又是一声大吼, 他一双脚狠狠地在地面上顿着, 震得满堂厅里的椅子哗哗作响。

(储 p158)

「そんなはずはない!」楊来春はまた怒号をあげた。彼は講堂の中の椅子がぶつかる音がするほど、地団太を踏んでいる。

(14)も(12)と同じように方位詞の“里”が使われ、“堂厅”は“里”によって場所化され、“满”はその場所にある“椅子”が「いっぱい」であることを表す。“里”がなければ、“一堂厅的椅子”というふうに“满”を“一”に置き換えることもできる。その場合たくさん椅子のある“堂厅”を一つの単位としてとらえているにすぎない。ところが、方位詞がつくと、“一”とは共起できなくなる。儲(1996)によると、“嘴(口)、屋(部屋)、地(地面)、脸(顔)、街(町)”などはいずれも

满嘴里(口いっぱい)、满屋里(部屋いっぱい)、满地里(地面いっぱい)、

满脸上(顔いっぱい)、满街上(町じゅう)

のように、後に方位詞をつけることができ、さらにそれが“满”によって修飾されることができるといふ。“嘴(口)、屋(部屋)、地(地面)、脸(顔)、街(町)”などの名詞は前述のように、ある種の「容器」として考えられるので、借用量詞として、

一嘴、一屋、一地、一脸、一街

のように“一”とも共起できる。しかし、後ろに方位詞がつくと、“一”と共起できなくなる。

*一嘴里、*一屋里、*一地里、*一脸_上、*一街上

このように、「容器」の性質を持つ名詞が後続する方位詞と共に、“満”によって修飾されうるのに対し、その名詞が借用量詞として“一”と共起すると、方位詞の後続が拒否されてしまうことから分かるように、“一+借用量詞”が用いられるときの認知のフォーカスは「容器」全体を一つのものとしてとらえられ、“満+名詞”が用いられるときの認知のフォーカスは「容器」の内容、空間に置かれるということがいえる。

“満+名詞”は方位詞が後続しなくても、「容器」の内容、具体的な空間に注目する場合に使われるので、行為が行われる場所詞としても機能しうる。例えば、

(15) 然而、老田满村找来找去、高低找不见她。（短篇小说）

しかし、田さんは村じゅう探しても、どうしても彼女が見つからなかった。

(16) 你过去挺朴素、现在却穿着花裙子满街跑、成何体统！（短篇小说）

昔のあなたはとても質素だったが、いまはなんと花模様のスカートを身につけながら、町じゅうを回るなんて、なんということだ。

(15)と(16)における“満村（村じゅう）、満街（町じゅう）”は連用修飾語として用いられている。“找来找去、跑”はいずれも具体的な動作であり、その動作が“村”と“街”のあっちこっちで行われるため、“満”によって修飾されうるが、“一”に置き換えると、不自然な文になる。

3 “一”と“満”との表現機能における違い

また、表現機能から見ても、“一+借用量詞”と“満+名詞”がどのタイプの表現に用いられるかの点においても違いが見られる。特に、“満+名詞”は行為の叙述よりも、結果または状態などの描写構文に多く用いられる。

(17) 一个跑得满头大汗的通讯员送来一份代电交给团长。（短篇小说）

顔じゅう汗まみれになった通信兵は頼まれた電報を団長に手渡した。

(18) 爸爸累得满身是汗、嗓子也哑了。（矛盾の小説）

父は体じゅう汗まみれになるほど疲れ果て、喉もかれてしまった。

(19) 他跟着就进来了、在机台上东摸一下、西搞一下、弄得满身油污。（短篇小说）

彼は後をついて入ってきた。器械の台の上であっち触ったり、こっち触ったりして、体じゅう油だらけになってしまった。

(20) 那年轻的乡下人满脸涨红、摇一下头、（矛盾の小説）

あの田舎の若者が顔を真っ赤にしながら、うなずいた。

(21) 他发高烧、满嘴起泡啦。（短篇小说）

彼はいま高熱で、口じゅう水ぶくれができた。

(17)～(19)における“満”はいずれも“～得～”構文に用いられている。中国語の“V+得+～”構文は様態補語として様態の描写に用いられるときに使うものである。(20)と(21)は“～得～”構文ではないが、“满脸涨红”は田舎の若者の顔の表情を描いたものであり、“满嘴起泡”は高熱によって口いっぱい、水ぶくれができた状態を描いたものである。したがって、(17)～(21)はいずれも実際の目の前の情景ないし場面をとらえて描写するためのものである¹¹⁾。このような描写の場合、“満”を“一”に置き換えることは難しい¹²⁾。

(17')?一个跑得一头大汗的通讯员送来一份代电交给团长。

(18')?爸爸累得一身是汗、嗓子也哑了。

(19')?他跟着就进来了、在机台上东摸一下、西搞一下、弄得一身油污。

(20')?那年轻的乡下人一脸涨红、摇一下头、

(21')?他发高烧、一嘴起泡啦。

一方、“一+借用量词”は次のような行為の叙述に多く見られる。

(22) 她做了一桌子(的)菜。

彼女はテーブルいっぱいの料理を作った。

(23) 贴了一窗户(的)剪纸。

窓に張り紙をいっぱい貼った。

(24) 买了一卡车(的)西瓜。

トラクター一台分のスイカを買った。

(25) 他从镇上城皇庙前露天的“说书场”听来了一肚子的疙瘩东西……。(矛盾の小説)

彼は町の城皇廟前にある露天の講談場からたくさんのわけの分からないことを聞いてきた。

(22)～(25)にある“一+借用量词”は共に「V+了+～」構文に使われたものである¹³⁾。(22)～(24)は数としての“一”と「いっぱい」の両方の読みが可能である。朱德熙(1982)によると、“一+借用量词”と被修飾語となる名詞との間に“的”が挿入不可能な場合は計数の機能であるが、“的”が挿入可能な場合は“満”の意味になるという。これに従えば、(22)～(24)はいずれも“的”が挿入可能であるため、どれも“満”の意味を表すことが可能だということになる。しかし、前述のように実際に“満+名詞”が状態の描写に用いられるのに対し、これらの文は生の眼前のある様子、場面を描く状態の描写ではなく、いずれも何らかの行為を述べるものである。このような行為を叙述するとき、“満”を用いると、不適切な文になる。

(22')?她做了满桌子(的)菜。

(23')?贴了满窗户(的)剪纸。

(24')?买了满卡车(的)西瓜。

(25')?他从镇上城皇庙前露天的“说书场”听来了满肚子的疙瘩东西……。

前述したように、“一”は本来数詞であり、「いっぱい」という意味はもともとそこから

派生されたものである。したがって、たとえ「いっぱい」という読みが可能な場合でも、多少なりとも本来の数詞としての機能が残る。つまり、“一+借用量詞”が「V+了」構文に使われる場合は本来の計数機能のほうが優先されることになる¹⁴⁾。ただし、計数といっても、それは単に「一、二、三」に対しての“一”ではなく、(容器で数えるに値するほどの量の入った)容器全体を一つの単位としてとらえるものである。一方、“満+名詞”も一見行為叙述文に用いられることはある。例えば、

(26) 脚下一个饺子碗摔得粉碎、饺子和汤撒了满地……怎么办呢? (短篇小说)

足元にある餃子の入った茶碗が割れてしまい、中の餃子とスープが地面いっぱいにこぼした。

(27) 我俩没事还练打算盘、画全国铁路示意图、还把全国各大站的里程、票价写成标签、

贴了满屋子、得空就背。 (短篇小说)

私たち二人はやることがないので、そろばんの練習をしたり、全国鉄道の略図を描いたりする。さらに全国の大きい駅の距離メーター、値段をラベルに書いて、部屋いっぱいに貼り、暇なときに暗記する。

この二つの文では“満”は「V+了」という行為の叙述を表すのにもっとも適した構文に用いられているものの、動詞が“撒(まく)、貼(はる)”といった行為をした結果、何かが残る結果性のものであるので、“満”はここでもやはりその結果の状態を描写するために用いられていると考えてよからう。

以上、“一+借用量詞”と“満+名詞”の違いについて述べてきたが、それをまとめると、次のようになる。

	一	満
共起する借用量詞と名詞はいずれも「容器」の性質を持つ	○	○
“满满”によってさらに修飾されうる	○	×
「容器」全体を一つの単位としてとらえる	○	×
「容器」の内部、具体的な空間に注目	×	○
さらに方位詞を後続することができる	×	○
主として状態の描写に用いられることができる	△	○
主として行為の叙述に用いられる	○	△

4 日本語の「じゅう」と「いっぱい」

次に“一+借用量詞”と“満+名詞”が日本語に訳される場合にどんなものが対応するかを見てみる。

(28) 淋了一身雨 (中日辞典 小学館)

体中雨にぬれてしまった。

(29)一桌子菜

テーブルいっぱい料理

(30)満屋子烟味儿 (中日辞典 講談社)

部屋中にタバコのおいがたちこめている。

(31)笑容满面 (日中辞典 小学館)

顔いっぱいに笑みをうかべる。

(28)と(29)では“一+借用量詞”(一身、一桌子)が使われ、(30)と(31)では“満+名詞”(満屋子、满面)が使われている。(28)～(31)における“一+借用量詞”と“満+名詞”は同じように「じゅう」と「いっぱい」で日本語に訳されている¹⁵⁾。つまり、すくなくとも日本語では体系的に「じゅう」と「いっぱい」などが対応可能なわけである。しかし、同じく使われているから、「じゅう」と「いっぱい」は同じというわけではない。以下、“一+借用量詞”と“満+名詞”の対訳として多く使われている「じゅう」と「いっぱい」について見る。「じゅう」と「いっぱい」には“一+借用量詞”と“満+名詞”と対応しない用法もあるが、ここでは容器を表す名詞と共起する場合のみを対象とする。

まず、次の例を見よう。

(32)庭じゅうの木

庭いっぱいの木

(33)庭じゅうに花が咲いている。

庭いっぱいに花が咲いている。

(32)と(33)における「庭」は広い意味では容器としての性質を持つものであり、「じゅう」と「いっぱい」の両方と共起できる。これだけ見れば、両者はたいして違いはないように見えるが、しかし、実際は「じゅう」と「いっぱい」は異なる意味機能を持っている。両者の辞書的意味であるが、「じゅう」は「ある範囲の全体」を表し、「いっぱい」は「一定の容器・場所などにものの満ち満ちているさま、また、量の多いさま」を表す¹⁶⁾。

(34)ふたを開けると、かびの臭いがいきなり鼻を襲った。トランクいっぱいの本がトランクいっぱいの黄ばんだ紙屑に変わっていた。(季刊中国現代小説(日訳より))

上の例では「トランク」の後に「いっぱい」が用いられ、「トランク」という容器の中は少量ではなく、ぎっしりと本が詰まっているさまを表している。

(35)おおきなふろしきいっぱいのねこの絵はかなりおもたかったが、おとこのこはへいきなかおよ。(かみしばい)

(36)「おまえが悪いよ。その子らに分けてあげなくてはいけないんだよ。袋いっぱい探ったんだろうが。……」(季刊中国現代小説(日訳より))

(37)ある日、わたしが家に入ると、またしてもベッドいっぱいテーブルいっぱいに幼児本が散らばっており、しかもせっせと並べているのは息子ではなく母だった。(季刊中国現代小説(日訳より))

(38)医師は口いっぱいのピンロウをクチャクチャ噛みながらやって来て、……」

(35)~(38)は(34)と同じように「いっぱい」が使用されており、これらの文ではある容器、場所にももの量が多いだけでなく、その量が(前述したように)ぎっしりと空間全体を満たしたことを表す。一方、「じゅう」は範囲の全体の指定を表すもので、量の多少は問題ではない。したがって、このようなもの量が空間全体を満たしたことに注目した場合には用いられない。(35)~(38)の「いっぱい」はいずれも「じゅう」に置き換えることはできないであろう。

(34')*ふたを開けると、かびの臭いがいきなり鼻を襲った。トランクじゅうの本がトランクじゅうの黄ばんだ紙屑に変わっていた。

(35')*おおきなふろしきじゅうのねこの絵はかなりおもたかったが、おとこのこはへいきなかおよ。

(36')*「おまえが悪いよ。その子らに分けてあげなくてはいけないんだよ。袋じゅう採ったんだろうが。……」

(37')*ある日、わたしが家に入ると、またしてもベッドじゅうテーブルじゅうに幼児本が散らばっており、しかもせっせと並べているのは息子ではなく母だった。

(38')*医師は口じゅうのピンロウをクチャクチャ噛みながらやって来て、……」

「じゅう」が用いられるのは範囲全体を指すだけで、もの量が多いかどうかは関係のない次のような例文である。

(39) とたんに、家じゅうはじけるように泣き声があった。(季刊中国現代小説 (日訳より))

(40) 囲炉裏を男たちがぐるっと囲み、みな、辛い刻み煙草をすばすばやりながら、聞き手が体じゅうカッカツとなるような色話をしゃべりながら、……

(季刊中国現代小説 (日訳より))

(41) ひい爺さんはどうしようもなく、村じゅう頼みまわって、女たちに乳を恵んでもらった。

(季刊中国現代小説 (日訳より))

(39)は「家」という範囲全体を示し、泣き声がいっぱいあるという意味ではない。(40)は体という範囲を示し、色話がいっぱいだということを表すのではない。(41)にいたっては、村のあっちこちの意味で、村に何かがいっぱいという意味ではない。これらの例は逆に「いっぱい」による置き換えは不可能である。

(39') *とたんに、家いっぱいはじけるように泣き声があった。

(40') *囲炉裏を男たちがぐるっと囲み、みな、辛い刻み煙草をすばすばやりながら、聞き手が体いっぱいカッカツとなるような色話をしゃべりながら、……

(41') *ひい爺さんはどうしようもなく、村いっぱい頼みまわって、女たちに乳を恵んでもらった。

「じゅう」は範囲全体に注目する場合に用いられるため、その範囲全体にももの量が多い、あるいはそれ以外のものはなく、そればかりがたくさんあるというときには後ろに「だら

け」を付加する必要がある。例えば、

(42) わたしたち親子は腹がふくれあがり、口じゅう血だらけになるまで食べて、やっと手を休めた。
(季刊中国現代小説 (日訳より))

(43) ふしぎなのはだれもが前日の夜、夢に長衣を着、顔じゅう髭だらけの老人が現れて、こう告げたというのだ。
(季刊中国現代小説 (日訳より))

(42) と (43) では「じゅう」のあとに接尾語の「だらけ」が使われている。「じゅう」が「だらけ」と共起できるのは「じゅう」には「いっぱい」の意味が含まれていないからである。この点、「いっぱい」は「だらけ」と共起しにくい。「いっぱい」にはすでに物が充満している意味が含まれているため、「だらけ」は余剰的な成分になってしまう。この点においては、中国語の“満+名詞”にさらに“满满”が付加できないのと類似している。しかし、次の用法では中国語の“満+名詞”と異なる。中国語では“満街找(人)”と言うが、日本語では「町いっぱい(人)を探す」とは言えない。この場合は「町じゅう(人)を探す」と言う。「じゅう」が量の多さを示す「だらけ」と共起できる点について、中国語の“一+借用量詞”と似ている。つまり、“一+借用量詞”もいっぱいを表す副詞“满满”と共起できる。しかし、日本語の「じゅう」は範囲を示す機能のみで、中国語の“一”の容器として示す機能は必ずしも持ち合わせていない。したがって、使用上かなりの部分で中国語の“一”ともずれが生じることが予想される。

5 終わり

以上、中国語の“一+借用量詞”と“満+名詞”について、その意味と構文の違いのみならず、認知的な観点や表現機能からも違いがあることを指摘した。しかし、日本語の「じゅう」と「いっぱい」については、その違いの説明につとめたものの、中国語との対照で両者の相異についてはややあられずりの感が否めない。すべて今後の課題としたい。

注：

- 1) 朱德熙 (1982)、刘月华等 (1983) など。
- 2) 現代中国語の文法では、数詞は直接名詞を修飾することはできない。数詞が助数詞を介して名詞を修飾する。
- 3) プロトタイプの容器と共起する場合は二つの意味解釈が可能であるが、身体部分を表す名詞の場合は“出了好几身汗”(何回も汗が出た)は言えるが、多くの場合“満”(いっぱい)の意味になる。
- 4) ただし、実際にどちらの意味で用いられるかは文脈によるが、われわれの日常の経験で、ある種の名詞を計数機能として使わないこともある。例えば、“樹”を特別な場合以外には“院子”(庭)で数えることはしないだろう。そういう意味では「ひと庭の木」よりも「庭いっぱいの木」の意味が優先して解釈されるであろう。
- 5) 現代中国語では“一”は直接名詞を修飾できない。名詞を修飾するには助数詞を伴う。

头汗”なら、“跑了一头汗”が普通である。

13) 中国語の「V+了+～」は「V+得+～」と違い、行為の完了を述べる構文である。

14) 「V+了+o」構文は一般に限界性のあるものが要求される。限界性は動詞のレベルだけでなく、数量詞によっても実現可能である。(22)～(25)の“一+借用量詞”もそうした機能を果たしている。

15) 中国語の“一+借用量詞”と“满+名词”は多くの場合、日本語の「じゅう」と「いっぱい」に訳されているが、そのほかに、

(1) 小孩儿吃点心，掉了一桌子 (的) 渣子。(杉村 1994)

子供がおやつを食べ、テーブル一面にカスをこぼした。

(2) 开了满院子花

庭一面に花が咲いている。(中日辞典 講談社)

(3) 满脸大汗

額から汗がだらだらと流れる。

のように、「一面」で訳されたり、意味で訳されたりする場合もあるが、ここではとりあえず「じゅう」と「いっぱい」だけを問題にする。

16) 岩波国語辞典によると、「じゅう」は「ある範囲全体」を表すとされるが、しかし、どこまでの範囲が「じゅう」によって示されうるかについては、今のところまだ分からない。例えば、「庭じゅう、部屋じゅう、体じゅう、顔じゅう、口じゅう」とは言えるが、「箱じゅう、テーブルじゅう、足じゅう、手じゅう」などとは言えない。

* 本稿の例文の一部に「大阪外国語大学中国語入力テキスト」を用いた。このテキストを作成された大河内康憲先生に感謝の意を表したい。

参考文献：

輿水 優 1984『中国語の語法の話——中国語法概論』光生館

杉村博文 1994『中国語文法教室』大修館書店

古川 裕 1997「数量詞限定名詞句の認知文法 ——指示物の〈顕著性〉と

名詞句の〈有標性〉——」 『中国語学論文集』 東方書店

山梨正明 1995『認知文法論』ひつじ書房

丁声树等 1979『现代汉语语法讲话』中国语文杂志社编 商务印书馆

刘月华等 1983『实用现代汉语语法』 外语教学与研究出版社

陈保存 1988『汉语量词词典』福建人民出版社

储泽祥 1996「“满+N”“全+N”」『中国语文』第5期

朱德熙 1982『语法讲义』 商务印书馆

王红旗 1999「说说“V满”」『汉语学习』1999. 3

王希杰 1990『数词·量词·代词』教学语法丛书之四 人民教育出版社